

## 青年期の自己愛人格について — 実証的研究を中心に —

三船直子・氏原 寛

### Narcissistic Personality on adolescence — a study of Narcissistic Personality Inventory —

NAOKO MIFUNE and HIROSHI UJIHARA

#### 問 題

現代がナルシズムの時代であると言われて久しい。1980年DSM-III（精神障害の分類と診断の手引き）に、新たに「自己愛人格障害」が加えられて以来、自己愛への関心はとみに高まっている。しかし一方で、Pluvertが指摘しているように“Narcissism”という言葉は、非常に拡散的に用いられてもいる。それは、“Narcissism”という用語が、心理的状況と文化的状況の両方を説明する言葉だからである。また、自己愛の概念を明確にしようとする場合、メタサイコロジーあるいは、精神分析的な議論と臨床場面でみられる、自己価値（self-esteem）の調整の異常についての議論とを視野におさめる必要がある。

本稿では、まず自己愛について、精神分析的な意味でそれに深く立ち入ることはせず、主に現象的に現われている個人の振る舞いや、考え方等に限定しておくこととする。

#### 1. 青年期の臨床について

自己愛について筆者が関心を持つきっかけとなったのは、10年近く青年期（主として高校生）のカウンセリングに関わってきたこと、相談室での一人のクライアントとの出会いである。青年期の「自分探し」のただなかで、彼らは「自己愛」という問題に苦しんでいるように筆者には感じられたのであった。エリクソンのいうように（1959）自己愛の問題は自己同一性の確立にも深く関わっている「自己をめぐる問題」ではないだろうか。

自己愛は問題は常に「自己」へと還ってくる。であるとする「自己愛」の問題は自己愛障害のみならず自己をめぐる問題に苦しんでいる、もしくはどう苦しめばよ

いのか解らなくなっているクライアントにとって、また彼らと同行する筆者にとって、それゆえ重要な意味をもっている。

さて、この自己ということについて、一言ふれておく。サンスクリットの“atman”という言葉は自省的な意味での自分自身（自我心理学で言うところの自己表象にちかいもの）と同時にJungの言うところの「自己」=SELFを表しているという。主体であり、自我の内的な経験を表す自己という言葉とJungや、やや意味は異なるがコフートが後にいう心の宇宙の中心である自己という言葉との内容の混同もしくは融合はR. Gordonの指摘のように実に長い歴史をもっている。ここではこの「自己」という概念をあえてどちらかに限定するのではなく、そのつどどちらのことを意味しているのか吟味しつつ両方の意味で考えていきたいと思っている。

自己愛的な現象については、H. G. Nunberg（1979）が、Narcissus神話の中にその多くの特徴が現われているとして、次のように要約している。尊大、自己中心性、誇大性、共感の欠如、不適切な身体イメージ、貧弱にしか文化していない自己と対象の境界、永遠的な対象との絆の不在、そしてその心理学的な本質の欠如。これはNarcissus神話に対する捉え方の典型であり、また1980年DSM-IIIに新たに加えられた診断基準である「自己愛人格障害」の記述に見事に一致している。

ここでDSM-IIIにおける自己愛人格障害について簡潔にまとめておこう。「この障害の本質的な特徴は、全般的な誇大感（空想、または行動）他者の評価への過敏性、共感性の欠如が成年早期までに始まり、様々な状況で明らかになるもので、この障害を持った人々は、自己の重要性についての誇大感をもつ。現実的な達成がない場合でさえも“特別”（special）な者として認められる事

を期待する。自分の“特別さ”のゆえに、彼らの問題はユニークで、他の“特別な”人にしか理解することは出来ないと感じる。しばしば、この自己の重要性の感覚は、特別な無価値感に交替する。他者に対し絶えざる嫉妬心を抱く。また求めているゴールが達成される場合にでも、追い詰められた、喜びの無い本質と満足することが出来ない野心とをしばしば伴う。自尊心 (self-esteem) は必ず、脆い壊れやすいものである。他者による承認に捉われてしまっている。これはしばしば、絶えざる注目と称賛を求めて止まない自己顕示の欲求という形をとる。批判に対する反応は、憤激、羞恥、侮蔑 (Narcissistic rage と言われているもの) をもって反応する。(たとえそれが、判別しがたい雰囲気程度のものでも) また、相互人格的な関係は、必ず障害されている。(搾取的、他者利用的) 共感性の欠如は顕著である。しかし現実吟味力、適応は比較的良好である。」

これほどまでに極端なものではなくても、全般的な誇大感、他者からの評価に対する過敏性、共感の欠如、過剰な自己意識と同世代から離反しつつ、特別な自分にとっての特別な対象を希求するなどは、青年期にあってはよくみられる心性である。時として、深くこの世界に沈潜し、そこに潜り抜けて行かなければならないという課題に直面する青年も多数くいるように筆者には感じられる。

様々な心の問題に苦しむ時、自我発達のありようを考えることは非常に重要な事である。そしてそれと同時に、生涯を通して発達する自己愛 (Kohut 1966) の発達段階から見た現在の状態とをいわば複眼的に捉え、その両方へのまなざしのなかに臨床関係を築いてゆくことは、特に「青年期の意味」に関わる場合重要な視点ではないかと考えている。

#### 青年期・臨床・自己愛をめぐる

そこで青年期について概観する。青年期についての一般的な定義は、「第二次性徴の発現によって始まる、児童期から成人期への過渡期と位置付けられている期間」となる。年令的には12,3才から23才頃までを言い、日本ではほぼ、中学から大学に至る期間である。しかし現代では心理学的には青年期は30代前半にまで延長されつつある。(笠原1976) ひと口に青年期にとっても10年長くて20年近い期間をもつことになる。筆者が関心を抱いている青年期後期は、17,8才からブレ成人期と言われる30代前半に至る期間をさす。青年期の遷延化はいわゆる「永遠の少年」(Franz, M, 1970, 氏原 '77, '90) や「モラトリアム人間」(小此木 1978, 80) とも関連してくる。また現在の青年自体がモラトリアムを通過するものとし

て経験するのではなく、モラトリアムと同一化しているという指摘もあるが、それでもやはりどのような形態であるにしろ、自己同一性確立が重要なテーマとなる時期である。

さらに筆者は青年期を時間的に枠組みの中で捉えるだけではなく、内外の様々な問題に直面しつつ、自己同一性を求め、自己を時間の連続と経験の総体としてまとめあげることを必要とする、あらゆる人生の節目における「青年期的意味」として捉えたいと考えている。その原点として、時間軸上の青年期に強い関心を抱いているのである。マージナルマンである青年はこの時期における試行錯誤を通して、Erikson の説く発達課題である自己同一性を確立していく。と同時に筆者にはこの時期、人が自己を自己同一的にまとめあげようとする初めての試みの時期であることに、意味深いものがあるのではないかと感じている。またこの時期は様々な精神障害の発症の好発の時期としても重要である。私とは何者なのか。何処から来て、何処へ行くのか。という問いを抱える中で、また身体的成熟によってもたらされる、以前とは比べものにならない多くの葛藤に揺さ振られる中で、より深い問題が現われてくる時期でもある。

ところがまた一方で、村瀬 (1976) が紹介されている「青年期平穩説」にみられるように、青年の多くは大きな葛藤や揺れを経験することなく、この時期を通過して行くのではないかと考えるもある。しかし、これと平行して身体的な愁訴を持ち、悩みを心身症という形で外在化させる青年群も注目を集めている。両者の間には、なにか関連性があるように思われる。

さて、筆者の関わった青年達は一時的にはあるが、深い自我拡散を体験し、それをまとめあげることに共に数年を要し、彼らなりにターニング・ポイントを越えたと思われる者、越えつつある者、さらには精神的な医療ケアを受けつつ、一方で筆者と対話を重ねていく者である。その中で多くのものを与えてもらった事に筆者は感謝している。様々なアクティング・アウトに悩みながら、彼らは自己や自己感情にまつわる傷付き、また対人関係の混乱に苦しみ、両親との愛情と憎しみにまつわる深い葛藤を抱えている。その中で、先の Nunberg の描いてみせた Narcissu 神話の中の自己愛の多くが現われていたと筆者には感じられるのである。自己愛的なものは、自我同一性確立の根底に関わっているのではないだろうか。相談室において筆者が出会ったクライアント達もまた例外ではない。

青年期と自己愛の関連は Jacobson (1964) も青年は乳幼児期の愛情対象から離脱して行く程度に応じて、自

己愛的な没入に浸る長い時期を通過すると説き、H. Deutsch (1944) も青年期における自己愛の増大を説いている。筆者の会った青年の一部はOffer, D&J (1975) のいう激動成長タイプと多くの点で共通している。即ち、内的な混乱に対応する様々なアクティング・アウトがあり、再三にわたり自分についての疑念を強く持つが内省する力はある—ときにこの内省は知的な言説を弄ぶという傾向に陥りやすいが—サブクリニカル群及び、ノイローゼ群である。カウンセリング関係を通して、彼らは自己のいわば影の部分と否応なく出会い、それに怯え、一端は拒絶しようとはんばり、それでも意識に侵入してくる以前にはネガティブだと感じていた自己のある面を組み入れ、自己同一的に自分をまとめていく初めての作業を行なう。筆者はそれに同行したのである。その際、現代の青年はかつて言われていたような実存的な悩みに悩むというよりは、(勿論、この姿も見方によれば自己についての過度の心理学的関心の集中という点では、自己愛的な姿と言えなくもないが) むしろ自己愛的悩みを悩むと言い得るように思われる。(ここで言う自己愛的悩みとは自己の誇大感や全能感の膨張とその傷付きである。)

青年期の心性についてさらに注目しておかなければならないものに、境界例心性がある。これは「モラトリアム人間」を逆照射したところに浮かび上がってくるものである。自己愛が幻想と脱幻想に関わるものであるとすると、この境界例心性は構造と脱構造に関わっている。これは自己に形を与えるという自己同一性確立の中核的問題である。自己を時間の連続と経験の総体としてまとめあげるとは、一面では主体的に自己に枠組みをはめ、自己限定、自己規定する作業でもある。この作業も猶予され、むしろ形を選ばないまま(選べないまま)で、漂うような心性が境界例心性であり、自己拡散状態である。J. E. Masterson (1981) は自己愛障害と境界例障害の関係をコインの表裏であると表現している。さらにこれらの人格障害は、発達的には分離—固体化期 (Mahler '75) の障害だと言われている。青年期は第二の分離—固体化期 (Masterson '72) である。それだけに、境界例的心性が優勢に現れてくる時でもある。水鏡を覗いて自らの姿を探し求めるナルシスの後裔たち (Jacoby '85) の姿は、筆者にはますます境界の様相を深める現代にあって (鈴木茂 '86, 成田 '89) それでも、自己同一性を求める内的な試みのように感じられる。

さて現代の青年期とそれを捉えるさまざまな観点について考察してきた。さて、本稿は、青年期に対しての以上のような視点に立って、一般青年の自己愛を実証的に調査することを目的とする。日本における自己愛の研究

は精神分析の分野での事例研究が中心で、臨床群、非臨床群を対象とした実証的研究は少ない。そこで、まず、自己愛についての内外の実証的研究の動向を振り返っておく。

### Narcissismの実証的研究

1914年にNarcissismの概念が精神分析の世界の中に導入されて以来、その概念をめぐる研究と同時に、Narcissismを測定しようという試みが数多くなされてきた。いくつかの人格変数の中の一つの変数としてNarcissismを測定しようとする試みは、1838年Murrayにはじまるといってもよいであろう。彼は顕在欲求、潜在欲求、内的因子を人格の変数として分類しその一部として、Narcissism尺度を開発した。

日本ではこの尺度の中のNarcissism尺度を用いて細井啓子 (1977 '78 '81) が、Narcissism的傾向の測定研究を継続的に行なっている。また心的発達を10段階に分けその中の一つを表すものとして、Narcissismを投影的に測定しようとしたBlum (1950) の研究や近年ではAsyley, Lee & Duke ('79) またSolomon ('82) が19項目からなるNarcissism的人格障害尺度(NPDS)を作成している。これはDSM-IIIの自己愛人格障害の診断基準に基づいて自己愛人格障害を臨床的に診断することを意図して作成されたものである。Millon ('82) はMCMI (Millon Clinical Multiaxial Inventory) の中にNarcissism人格尺度を組み入れている。

Narcissismを一つの人格特性としてとらえて開発された尺度には、Goldman ('77), Windholz ('79) のNarcissismの精神病理を評定する観察者評定尺度や、Patton, Connor & Scott ('82) のKohutの自己愛理論をもとにしたクライエントの自己図式凝集性尺度などがある。また心理学的なNarcissism概念の測定を試みたものにPhares & Eeshineの自己中心主義尺度がある。これはあえて精神分析的意味を避け自己愛を態度としてとらえようとしたものである。Raskin & Hall ('79) によって作成されたNPI (Narcissistic Personality Inventory) は、DSM-IIIではじめて取り上げられた自己愛人格障害の記述的診断基準で特徴づけられる性格パターンを「自己愛人格」と定義して、個人がこの自己愛的人格特性をどの程度持っているかを測定するための質問紙検査である。先にあげたNarcissism的人格障害尺度(NPDS)、MCMIの中のNarcissism人格尺度とは異なり、人格障害診断のための検査ではなく非臨床群のNarcissismの個人差を測定する意



図で制作されたテストである。この人格尺度の日本語版を用いて、大石、福田が高校生、大学生の自己愛人格の調査を行なっている。(1987 '88 '89) また佐方 (1986) はこの尺度をもとに新たにSNPIを開発し調査している。投影法における自己愛傾向の診断には精神分析的概念を記述的に定義しておいてTAT(Themantic-Apperception-Test) やRT(ロールシャッハテスト) の反応のなかにその主題や内容が出現する頻度やその傾向の強度などを測定するという方法が試みられている。一例をあげると、Harder (1979) はEM(初期記憶テスト)、RT、TAT 等による野心的-自己愛的性格様式を評価する採点指標を作った。またUrist (1977) は二次的 Narcissism の発達レベルを測定するための自立相互性尺度を作成している。以上のような内容-主題分析の方法の他に形式-構造的側面からも分析が行われている。後者の研究には Exner (1968) による鏡映-反射反応(mirror/reflection response) やペア反応(pair-response) からなる自己愛指標(自己中心性指標) がある。また Exner (1973) は自己愛傾向を測定するために文章完成法テスト(自己焦点付け文章完成テスト) を作成し、上記のRTの自己愛指標との関連性を調査している。

## 方 法

### 各テストについて

今回の調査で用いる質問用紙について、簡潔にその特徴を説明しておく。

#### ①NPI (NARCISSISM PERSONARITY INVENTORY)

先にも実証的研究の概観の中で取り上げたようにこの人格尺度は、1979年、Raskin & Hall によって作成された質問紙である。

彼らはDSM-Ⅲの自己愛人格障害の診断基準の記述に対し、これは正常群も等しく分かち持つ人格特性ではないかという疑問を出発点とし、その診断基準をもとに自己愛的人格を記述的に定義したうえで、個人がどの自己愛的特性を持っているかを測定するために54項目からなる人格目録NPI を作成した。数回の研究によって、NPI は高い内的一貫性を備え、いくつかの刊行された研究論文でも、その妥当性が証明されている。また他の尺度との関係も報告されている。(Emmons'81, '84, Raskin & Hall '80, Raskin & Terry '88, Watson et al '83)。現在のところ自己愛人格側面の測定尺度としては最も信頼性の高い尺度であると考えこれを用いて調査を行なうこととする。

#### ②IDS (同一性混乱感尺度)

自己同一性を測定するために作成された質問紙は数多くある。その中で、この「自己拡散感尺度」は1982年中西、佐方によって、作成された質問用紙である。意識的感覚としての自己同一性は安定感や達成感としてよりも、不安全感や喪失感など同一性拡散状態の方が気付かれやすいとして、エリクソンの記述や臨床的知見から同一性拡散感を表現している文章を抽出して制作された10項目からなる質問用紙である。「非常によるあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答し、順に4〜0点で与えられ、この合計が同一性拡散感得点となる。彼らはこの尺度を用いて、青年期における同一性拡散感の発達の变化を調べるとともに、同一性拡散感と同一性感覚の関係を調べるため、Tan et al (1977) の同一性簡易尺度(MEI)、水野(1982)の自我同一性尺度(IS)との相関を調査している。結果、IDSとMEIの相関係数は-0.46、ISの下位尺度である「自我確立」とは、-0.37、「社会性確立」とは、-0.70という負の相関関係を見いだしている。この結果より、自己同一性拡散感覚は、社会のなかでの自分の位置付けが不明確になり、関わりがうまく行かないとき、特に強く感じられると考察している。人間関係を通して自己を形成していく側面から自己同一性みる方向性をもった尺度と言えよう。

#### ③IMQ (IMAGE QUESTION)

1972年、梅本らによって「心理療法の効果判定に関する実証的研究」の一環として作成されたテストである。自分や両親についてのイメージを、動物 植物 動植物以外のものという指定のもとアナログカルにのべてもらい、そのあとでその反応の理由を書いてもらうという一種の文章完成テストである。自己像や両親像などを心理学的に分析する方法は様々に試みられている。このテストでは動物 植物 及び、その他の事物のイメージを人々の自己像や両親像のアナロジーとして象徴的に述べてもらうことにより、必ずしも明確に、意識的に把握していないような漠然とした予感的な自己像や両親像を知ろうとするものである。質問Aは指定なしでの自己像、質問1〜6は動物 植物 動植物以外のものという指定で自分、父、母像を、最後に質問Bで理想的な自己像を指定なしでたとえてもらうというテスト構成である。(注1) 菅(1976)は、IMQ、RT、SC(文章完成テスト)を用いて、質問紙法と投影法で測定された自己概念や自己像、自己感情は心のどの層におけるものであるのかを調査している。質問紙法によって測定された自己概念を意識水

準における自己—現象的自己—とする、と投影法で測定された自己は無意識水準—非現象的自己—と呼ばれるものに相当する。SD法やIMQ によって測定されたものはその中間に位置するものであると考えられる。本研究ではIMQ の基調的感情色調—Feeling-tone に焦点を絞っている。これは筆者が適応との関係という観点から自己を考える際、最も重要なのは自己像の内容やその種類よりもそれらに伴う感情の質であると考えているからである。

Jacoby (1985) も、「自己イメージと結びついた感情のトーンは根本的にはより一層の洞察によっても変容することは難しい無意識に根を持つものである。」と言っている。

Feeling-Tone とはIMQ の各項目に回答した後、各々の反応を選んだ理由を述べてもらう際、その理由に流れている基調的感情トーンをP (Positive, 肯定的, 自我親和的, 好ましい感じで述べていくもの) N (Negative, 否定的, 拒否的, 批判的なまたは、憤懣的な調子で述べていくもの) E (Neutral, 単純な同定, 中立的, 客観的な調子で述べていくもの, その他不明のもの) に分類したもののことをいう。(注2) 自己感情トーン：自己イメージについての質問項目1～6の理由の評定。P, N, E, の得点はその度数で表されている。両親に対する感情トーン：両親イメージについての質問6項目の理由の評定。P, N, E, の得点は同じくその度数で表されている。さらに両親イメージの内訳として父親イメージに関するもの3項目、母親イメージに関するもの3項目のP, N, E, の得点を算出している。SD法も半投影法に属する検査であるが、SD法の場合、用いられる形容詞の限定を受けるものである点がその限界であろう。先の菅(1976)の研究では、IMQ の感情トーンをP, N, E を+1, -1, 0として得点化しているが本調査では主として自己と両親にイメージに関する肯定感情トーンと否定感情トーンに注目し、感情を一次的に点数化せずポジティブ、ネガティブの両面から検討を加える。イメージに関するもの3項目のP, N, E の得点を算出している。

## 結果と考察

### 調査 1

#### 手続き

a. 質問用紙構成 NPI-0, NPI-Nともに表紙に学年及び性別を記入し次ページの質問項目に進む形式。

b. 調査対象 大学生 371人(男子 192 女子 179)

関西の四生制の6大学(注1)。平均年令 19.85才(18～24)、年令分布は表1に示すとおりである。

c. 調査期間、調査方法 1990年6月～7月 最初にNPI-0を1ないし2週間後に、NPI-Nを講義及び授業の時間中に配布、実施、回収。一部、個人に配布、自宅にて記入ののち回収。

### 目的

NPI-N とIDS をもちいて、今回、調査を行なった大学生の自己愛人側面と自己拡散の特徴を押さえた上で、臨床的な実感としてある自己拡散感が自己愛人格とどのような関係があるかを調べるため、ピアソンの相関係数を求める。

### 結果

年令的变化及び、性差

NPI-N の平均は 100.647 中央値102SD 24.76 RA NGE 157 (12-169)

表1

AGE	FREQUENCY	PERCENT
18	69	18.6
19	98	26.4
20	90	24.3
21	66	17.8
22	32	8.6
23	14	3.8
24	2	0.5

年令差は年令高群—20～24才(204人) 低群—18～19才(167人)と分けてT検定を行なった(表2)。性差についてのT検査結果は表3に示す通りである。

次に、IDS の内的整合性を調べるためにCronbach の $\alpha$ 係数を求めたところ0.7393であった。(表4) IDS の平均は 23.34 中央値 24 SD 6.34 RANG 40 (H-40 L-0) 分布は図2に示すとおりである。NPI-N とIDS の相関係数を求めたところ、相関係数—0.06169 ns. であった。年令差は表5、性差は表6の通りである。また、自己拡散感と自己愛人格とはなんら相関関係は見られなかった。

### <考察1>

NPI-N の性差年令差の結果は大石、福田(1987,89)の先行研究(NPI-0)においても男子が女子より、また年令が高い方が自己愛人格得点は高いという結果と一致するものとなった。

表2 年令差

高群	N=167	低群	N=204	t	df=369
Mean	SD	Mean	SD		
103.4559	24.7500	97.2156	24.4198	2.4306	*

\*:  $P < .05$ 

表3 性差

男子	N=192	女子	N=179	t	df=369
Mean	SD	Mean	SD		
103.1197	26.3675	97.9944	22.6962	2.0105	*

\*:  $P < .05$ 

表4 ピアソン 相関係数

	MEAN	SD	MIN	MAX	Pearson
NPI-N	100.647	24.76	12	169	0.06169
IDS	23.326	6.34	0	40	ns

表5 年令差

高群	N=167	低群	N=204	t	df=369
Mean	SD	Mean	SD		
22.8627	6.7203	23.8922	5.8051	1.5825	ns

表6 性差

高群	N=167	低群	N=204	t	df=369
Mean	SD	Mean	SD		
22.2291	6.3756	24.5028	6.0970	3.5109	***

\*\*\*:  $P < .001$ 

IDSの性差年令差の結果は先行研究とはかなり異なつたものであった。

今回の調査で全体的に非常に特徴的であることは、その平均点の高さである。男女混合の平均点 23.34は先行研究の高校生女子さえも上回っている。

1982年当時、佐方が考察しているような「同一性拡散的心性」の一般化はますます進んでいると言うことができよう。

性差の点では先行研究同様、女子の方が高得点を示し0.01%の水準で有意な差がみられた。年令差の高群はおおよそ自己拡散はいまや現代青年の一般的な心性であるといえる事を改めて実感する結果となった。発達の変化の点で、中西らは先行研究の結果より高1年から大学教養までの期間をモラトリアム期間と位置付けている。今回の調査ではそのモラトリアム期間が大学学部期にまで延長されていると推測させる結果である。自我同一性拡散は一概にマイナスであると言えないことは、とみに小此木(1972, '79)の指摘するところである。さてNPI-NとIDSには全体としてはなんら相関関係は見られなかった。

## 調査 2

### 目的

調査1よりNPI-NとIDSには全体としては相関関係は見られなかった。そこで、さらにNPI-Nの因子構造を明らかにするため、変数間の関係を調べて、因子分析を行なう。項目の検討を行い、抽出された因子を試みに命名して、さらに各因子とIDSの関係を探る。

### 結果①

初期解を主分析解し、バリマックス回転をおこなった結果、6因子を抽出し、.35以上の負荷を示す項目を選択した。全分散への6因子の寄与率は22.41%であった。下位因子尺度の各項目の示す特徴からそれぞれの因子を解釈し命名を試みる。尚、因子分析の結果は表7。

### 因子の命名

因子Iは15項目からなり、ほめられること、人からの特別な扱いの期待、注目、注意を払われたいと言う願望を表している。DSM-ⅢRという自己顕示的欲求や自己の特権性を満たしてくれる対象を求めている心性がここには現われている。それはどちらかという相手次第で決まるという受け身的なもののように思われる。そこで先行研究に倣って因子Iを「注目願望」と命名してみよう。

因子Ⅱは10項目からなり、リーダーになる素質、性格的適合性、自信等、支配欲、自己主張、他者統制性などの内容となっている。「リーダーシップ」と命名しておく。

因子Ⅲは9項目からなる。主に自己の有能性についての自信、確信がのべられている内容である。DSM-ⅢRにある「自己の重要性やユニークさについての誇大感」に関係する因子のように思われる。これがいわゆる誇大感なのか、自己評価、自己確信なのかは後で検討したい。

「有能感」と命名しておく。

因子Ⅳは9項目からなる。自己中心的、野心、進取の気性に関係する項目からなり、積極性を感じさせる内容となっている。DSM-ⅢRの「限らない成功や権力、学才、美貌、理想の愛に執着すること」と「他者からの批判や無関心、あるいは自己の敗北に耐えられないこと」と関係している因子であろう。「野心」と命名しておく。

因子Ⅴは8項目からなり、因子Ⅲとは対照的にいづれも対人関係場面における自己優越感、有能感もしくは優越性を表す内容である。「優越性」と命名しておく。

因子Ⅵは5項目からなり、感受性の鋭さ、人の気持ちを読み取る力、美的感性と鏡を見ることへの嗜好、流行

表 7 各因子の項目と因子負荷量

因子	項 目	因子負荷量					
		I	II	III	IV	V	VI
I	N36 私は人からほめられることを望んでいる	.72	-.10	-.00	.17	.13	-.09
	N34 人がわたしのために色々してくれるのを期待している	.67	-.05	.00	-.04	.18	.04
	N20 周りの人が自分の期待しているだけの敬意をはらってくれないと気分が落ち着かない	.56	.07	.22	-.05	.07	.24
	N44 私には注目のまらになってみたいという気持ちがある	.56	.23	.13	.34	.16	.14
	N48 私はえらい人だといわれるような人間になりたい	.53	.03	.42	.12	.05	-.23
	N40 人のしあわせを見るとつい、ねたましくなる	.51	.01	.16	-.03	-.14	.03
	N52 大勢の人の前にてたとき、人が私に注意をはらってくれないとかえって落ち着かない気分になる	.46	.08	.22	.24	.07	.04
	N21 私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	.46	.01	.27	.01	.21	.20
	N12 どちらかといえば、私は注目される人間になりたい	.46	.29	.04	.56	.13	.14
	N42 私は鏡を見るのがすきだ	.41	.03	.02	.05	.36	.46
	N25 世間から見て、かなりの生活ができなければ満足できない	.40	.10	.28	-.03	.02	-.07
	N26 私は自分の体を見るのが好きだ	.39	.01	.16	.10	.22	.31
	N17 私は人々を従わせるような権力をもちたい	.39	.32	.48	.04	-.11	-.03
	N24 最悪の状況であっても、私は最高の調子を維持できる。(一)	-.37	.14	.19	.19	.24	.01
II	N38 私は支配欲が強いほうだ	.35	.49	.10	.10	-.24	.1
	N47 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている	.08	.80	.13	.13	.22	-.01
	N50 私は生れつきリーダーとしての素質をもっている	.09	.75	.22	.07	.27	-.00
	N15 私はよいリーダーになる自信がある	.03	.67	.30	.18	.27	.02
	N3 どうやら私は、ひかえめな人間というには程遠い人間だと思う	.01	.54	-.11	.27	-.09	.15
	N16 私は自分の意見をはっきり言うほうだ	-.11	.53	.06	.22	.02	.30
	N2 私は周りの人に影響を与えることができる才能を生れつきもっている	-.05	.51	.22	.25	.12	.23
	N38 私は支配欲が強いほうだ	.35	.49	.10	.10	-.24	.14
	N33 いつも私は話し合っているうちに、話の中心になってしまう	.06	.45	.06	.19	.45	.22
	N46 周りの人々はたいてい私の権威をみとめてくれる	.05	.45	.29	-.07	.39	.10
III	N19 自分の思い通りに人を使いこなすのは、それほどむずかしいくない	.05	.43	.36	-.22	.29	.02
	N53 自分は他人より有能な人間であると思う	.23	.10	.71	.08	.11	.10
	N54 私は周りの人たちよりも、ずばぬけたものをもっているとおもう	.24	.13	.63	.21	.04	.22
	N14 私は才能にめぐまれた人間である	.10	.18	.58	.22	.17	.10
	N43 自分自身では要領もいいし、賢明さもそなえていると思っている	.04	.26	.52	.04	.30	.07
	N17 私は人々を従わせるような権力をもちたい	.39	.32	.48	.04	-.11	-.03
	N18 私は周りの人が学ぶだけの値打ちある長所をいくつかもっている	.01	.18	.48	.16	.28	.29
	N48 私はえらい人だといわれるような人間になりたい	.53	.03	.42	.12	.05	-.23
	N51 将来、誰かに私の伝記を書いてもらいたい	.22	.10	.39	.29	-.12	.11
	N8 もし、この私が世界を事由にすることが出来るのなら、もう少しましな世の中にできと思う	.07	-.03	.38	.06	.04	.04
IV	N13 私は、かならず成功してみせる	.10	.10	.36	.53	.11	.10
	N19 自分の思い通りに人を使いこなすのは、それほどむずかしいくない	.05	.43	.36	-.22	.29	.02
	N5 どんなことにも、あえて挑戦するというようなやり方が私の性格にあっている	-.21	.19	.08	.59	.12	.09
	N28 このことときには、私は人目につくようなことを進んでやってみよう	.34	.26	.04	.58	.07	.20
	N12 どちらかといえば、私は注目される人間になりたい	.46	.29	.04	.56	.13	.14
	N11 私は、かならず成功してみせる	.10	.10	.36	.53	.11	.10
V	N6 私は人から強い人間だと思われたい	.05	.13	.11	.48	.09	.05
	N10 私はどんなことでも、あまりきかぬなどしないで自分の好きなようにふるまっている	.16	-.01	.22	.47	.05	-.16
	N37 自分自身の気持ちに忠実に生きるということが、まず重要なことだ	-.12	.33	.13	.43	.08	.01
	N7 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれると自分でもそうなんだろうと思う	-.02	-.04	.10	.40	-.01	.34
	N9 私に接する人は誰でも、私という人間を自然に気に入ってくれるようだ	.28	-.06	.20	.35	.28	-.28
	N32 人は誰でも、私の話を喜んで聞きたがる	.02	.12	.08	.29	.68	-.02
	N49 私が言えは、どんなことでもみんな信用してくれる	.11	.17	.01	.01	.66	.14
VI	N83 いつも私は話し合っているうちに、話の中心になってしまう	.07	.16	.21	-.04	.49	.13
	N3 私の健康は心身ともに最高だ	.06	.45	-.06	.19	.45	.22
	N41 人に好かれるのは、私自身にどこか魅力的なところがあるからだ	-.03	.05	.13	.28	.45	-.17
	N46 周りの人々はたいてい私の権威をみとめてくれる	.23	.05	.26	.16	.43	.32
	N42 私は鏡を見るのが好きだ	.05	.45	.29	-.07	.39	.10
	N39 私は人より先に流行を取り入れるのがすきだ	.41	.03	.02	.05	.36	.46
VII	N1 感受性のするどさと言う点で、私は他の人に負けないものをもっている	-.02	.17	.06	.13	-.01	.61
	N22 私には人の気持ちをずばり読み取る力がある	.01	.23	.16	-.16	.27	.60
	N27 私は美しいものを決して見逃さないすぐれた感性の持主である	.13	.05	.28	.14	.00	.56
	N42 私は鏡を見るのがすきだ	.41	.03	.02	.05	.36	.46
	N39 私は人より先に流行を取り入れるのがすきだ	.34	.28	.00	.10	.22	.36
寄与率		10.56	3.83	2.23	2.11	1.87	1.82



への敏感さなどの内容となっている。感受性の鋭さとは傷つきやすさにも通じるものである。イメージを重要視し、個性を強調する自己愛人格の特徴をよく表している因子である。「感受性」と命名しておく。なお自己愛と創造性の関係はRaskin (1980) が創造的人間と自己愛人格の性格特性の関係をNPI とBaron の象徴的等価性テストをもちいて検討し、自己愛と創造性との有意の相関関係を実証している。この因子は自己愛人格のこのような特徴をよくあらわしている。

## 結果②

次に各因子の特徴を把握するため、各因子の年令差(高群-H, 低群-L), 性差についてT検定を行なった。各因子の平均値, 中央値, SD等は表8, 年令差は表9, 性差は表10に示す通りである。年令差では因子I, Ⅲをのぞいた4因子で, H群がL群より有意にNPI 得点が高いという結果を得た。また性差では, 因子Ⅲ, IVのみが男子のほうが女子より有意にNPI 得点が高いと

いう結果であった。

各因子とIDS の相関係数求めた結果は表11に示す通りであった。IDS との相関では因子I は自己拡散感と危険率 0.1%で高い相関を示した。また因子Ⅱ, Vは危険率 0.1%で, 因子IVは危険率5%で逆相関をみた。

次に各因子の性差, 年令差及びIDS との相関関係を調べた結果より, 今回抽出された因子間にひとつの構造が明らかになったと思われる。

因子I「注目願望」が他の因子と性質を異にしているようである。即ち因子I は性差, 年令差はともに見られず, IDS と唯一, 正の相関を示している。他の因子では因子Ⅱ「リーダーシップ」とIV「野心」, V「優越性」, VI「感受性」はともに年令差は有意に学部群(H群)が高く, VIを除いて, いずれも自己拡散感ともに高い負の相関を示している。また, 性差は因子Ⅲ「有能感」, VIにのみ見られた。しかしIVは自己拡散感とも高い負の相関を見たが, Ⅲは相関関係はなかった。リーダーシップ,

表8 各因子一覧

	項目数	MEAN	SD	MEDIAN	MIN MAX
因子 I	15	31.74	10.05	32.00	4 59
因子 II	10	17.18	6.74	17.00	0 37
因子 III	11	19.24	7.27	19.00	0 41
因子 IV	9	22.66	5.80	23.00	4 36
因子 V	8	15.24	4.70	10.00	0 20
因子 VI	5	9.74	3.66	10.00	0 20

表9 年令差

Age	高群 Mean	N=203 SD	低群 Mean	N=167 SD	t	df=369
因子 I	31.8284	10.3388	31.6347	9.7274	0.1855	ns
因子 II	18.0539	6.9219	16.1138	6.3610	2.7851	**
因子 III	19.5539	7.2934	18.8503	7.2458	0.9272	ns
因子 IV	23.3284	5.8381	21.8503	2.4585	2.4585	*
因子 V	15.9461	4.4414	14.3832	4.8715	3.1982	**
因子 VI	10.2010	3.6380	9.1956	3.6149	2.6821	**

表10 性差

Sex	男子 Mean	N=192 SD	女子 Mean	N=179 SD	t	df=369
因子 I	32.2346	10.9511	31.2135	8.9963	0.9434	ns
因子 II	17.5052	6.7545	16.8324	6.7178	0.9612	ns
因子 III	20.8333	7.6810	17.5251	6.3937	4.5210	***
因子 IV	23.5885	5.9079	21.6704	5.5291	3.2229	**
因子 V	14.9114	4.7994	15.5977	4.5746	1.4101	ns
因子 VI	9.5521	3.7969	9.9500	3.5016	1.0464	ns

表11 NPI-N 各因子とIDS. 相関結果

NPI-N	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	因子 VI
IDS	0.19814 ***	-0.18925 ***	0.06492 ns	-0.12976 *	-0.18264 **	-0.03548 ns

\*\*\*:  $P < .001$  \*\*:  $P < .01$  \*:  $P < .05$



野心、優越性とはといずれも対人関係、社会を前提にしている自己の能力、資質に対する自信や確信の要素が大きい。しかしⅢとⅣの自己拡散をめぐる相違は、因子の命名において触れたように、そのまなざしが一他者との比較という形をとっているにしろ一自己に向けてであるか、外へ向かってであるかの点で、異なっていると言える。以上より、自己愛人格側面には性格を異にする下位尺度を想定することが出来、その特性の中には自己拡散感と逆に働く性質を持つものと拡散感を相俟って増減する性質を持つものがあることが明らかになった。このことからNPIとIDSは調査Ⅰで見たように全体として相関することがなかったのである。また性差、年齢差という情報から得られた結果より、因子群を対自己一対他という視点に立ってその構造の一端をつかむことが出来そうである。即ち、Ⅰ・Ⅱ、Ⅴ／Ⅳ・Ⅲ・Ⅵ（\*：年齢差、性差、IDSとの相関関係などの相違、／：対自一対他という相違）

### 調査 3

#### 目的

IMQの感情トーンから自己拡散感と自己愛人格側面

の特性を探ることを目的とする。（注2）

自己感情とは自分が抱いている自己イメージに対して、自我親和的（P）か、自我異和的（N）かということであり、それは自己を肯定的に受け入れているか、または受け入れることが出来ないでいるかを知る手がかりとなる。また、同様に、両親に対する感情も両親をどのように受け入れているかを知る手がかりとなるものである。自己拡散感や自己愛人格側面の特性はこのような感情面においてどのような特徴が見いだせるか調べることにする。但し、IMQの感情トーン（注3）は数量化することが難しい。P（肯定的特徴）N（否定的感情）E（中立的）は一元化しにくい性質のものである。そこで全体を見渡して、概ね肯定感を抱いている、もしくは否定感を抱いている群という線引を試みた。一応各々の感情価が他のふたつの感情価の合計を上回るところで線引をしてX<sup>2</sup>検定を行い、肯定感と否定感にIDS、NPIの因子とどのように関連するかを調べる。

#### 結果①

X<sup>2</sup>検定を行なった結果（表12）、自己拡散感については、自己肯定感情は自己拡散感の低群と有意な関連が、

表12 X<sup>2</sup>検定結果

X <sup>2</sup>	IDS	I	II	III	IV	V	VI
SP/Not-SP	6.879**	0.389ns	8.044**	15.085***	7.068**	13.586***	10.260**
SN/Not-SN	18.830***	0.110ns	10.885**	12.056**	12.644***	28.906***	7.754*

P<.001\*\*\* P<.01\*\* P<.05\*

表13 S-PD:S-ND 有意差検定結果

自己感情	P D群 Mean	N=31 SD	ND群 Mean	N=63 SD	t	df=92
IDS	20.2581	6.5522	26.6825	6.4470	4.5176	***
因子Ⅰ	31.8065	12.7656	32.0635	8.3451	0.1171	ns
因子Ⅱ	20.7419	7.2176	15.0159	6.5930	3.8542	***
因子Ⅲ	22.2581	8.0951	17.0159	6.8943	3.2698	**
因子Ⅳ	25.6129	5.4874	19.7778	5.6837	4.7322	***
因子Ⅴ	18.5161	4.1221	13.3175	4.0949	5.7742	***
因子Ⅵ	11.7097	3.3486	8.4444	3.2218	4.5613	***

表14 P-PD:P-ND の有差検定結果

	IDS	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ
両親	1.1434 PD<ND #	0.8862 ns	2.3028 PD<ND	0.0060 ns	0.4226 ns	2.9735 PD<ND	1.3456 ns
父	1.9543 PD<ND #	1.3016 ns	1.6109 ns	0.4617 ns	1.1285 ns	2.2166 PD<ND	1.2019 ns
母	0.3842 ns	0.3778 ns	1.698 PD<ND #	1.2381 ns	0.7406 ns	1.6412 ns	1.5899 ns

（注4）群分け以下に行なう。

S-PD群（31人）＝自己感情肯定優勢群：5<＝P<6  
P-PD群（92人）＝両親感情肯定優勢群：5<＝P<6  
F-PD群（90人）＝父親感情肯定優勢群：P=3  
M-PD群（100人）＝母親感情肯定優勢群：P=3

\*\*\*P<.01 \*\*P<.05 #P<.1  
S-ND群（63人）＝否定優勢群：5<＝N<6  
P-ND群（19人）＝否定優勢群：5<＝N<6  
F-ND群（32人）＝否定優勢群：N=3  
M-ND群（26人）＝否定優勢群：N=3

また自己否定感情は自己拡散感の高群と有意な関連が見られた。自己感情がネガティブなほど拡散感が高くなるという傾向があるといえよう。両親に対する肯定感情、否定感情はいずれも関連は見られなかった。NPI-Nの因子Ⅰについては自己及び、両親に対する肯定感情、否定感情とはともに関連が見られなかった。

因子Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは自己肯定感情は各因子の高群と自己否定感情は低群と有意な関連が見られた。自己感情がポジティブなほど各々の因子の得点は高くなるが、両親に対する感情は因子Ⅴを除いて、いずれも関連は見られなかった。因子Ⅴでは両親に対する否定感情だけが低群と関連が見られた。

## 結果②

結果①より、自己愛人格側面の各因子、自己拡散感と自己及び、両親に対する肯定、否定感情との有意な関連が明らかにされた。そこで、更に自己イメージ、両親(父、母)イメージの感情価についてポジティブドミナント群-ネガティブドミナント群と群別(注4)し、NPI-Nの各因子、IDSにおいて両群間の有意差検定を行なった。特に両親をさらに父、母とわけて、検定する。S-SPD群、S-ND群の各々については表14にまとめたとおりである。有意差の見られたもののみをまとめて示す。

## <考察2>

ここでは両親に対する感情とIDS、NPI-Nの各因子について考察を試みる。さて、父性性とは相対性、比較の原理、切断の原理(河合1967)である。そして自己同一性感覚とは先にも述べたように、他者との比較、同定を通して、自分とは何かを限定していくことでもある。言い換えれば、自分で、自分の枠組みを選びとっていく作業である。父親イメージに対する否定感情は、このような意味での父性性に対する自我違和感のあらわれであろう。「あれか、これか」という選択を迫られる場面を苦手とする側面が拡散感覚としてあらわれている。また、因子ⅡとⅤは調査で、対自-対他という視点から対地的要素を持った因子として意味付けた。まず、因子Ⅱ「リーダーシップ」にみられる自己主張性、外向性、影響力に対する自信を表す自己愛人格側面は自己へのポジティブな感情に支えられてのものである。と同時に母親-母性的なものに対するポジティブな感情との関連がみられた。母性性とは無差別的、絶対的な受容である。(河合1967)母親イメージに対する肯定感、このような母性性に対し自我親和的であることをあらわしている。とす

ると世界に対してこのような母性性を投影し、世界に対する能動的な働きかけをなす力や資質が自らにある、世界はそれに応じるであろうという確信が述べられているのがこの因子の特徴と考えられる。また因子Ⅴは「優越性」と命名した因子である。これも自己へのポジティブな感情に支えられてのものであると同時に因子Ⅱとは対照的に父親-父性的なものに対するポジティブな感情に支えられてのものとといえよう。先に父性性とは相対性、比較の原理、切断の原理(河合1960)であると述べた。これを通してある種の価値判断を下していくことがその本質であると思われる。そして価値ありとするものを受け入れ、なしとするものを切断する力を表している。即ち、母性的な「あれもこれも」ではなく「あれかこれか」というものである。調査2の考察で、筆者はこの因子にあるまじしは「他者を經由して自己へ」というものではないかと考えた。「世界に心よく受け入れられている。」「世界は私を気に入ってくれている。」という確信の根底には、自分は価値ある者として受け入れられているという感覚があるといえよう。因子Ⅴは自己価値の関わる因子である。

FEELING-TONEからみた因子の構造はⅠ／Ⅱ／Ⅴ／Ⅳ／Ⅲ＊Ⅵ／となる。

## 総合的考察

### 1. 青年期後期の自己拡散感について

自己拡散感の高さについて再度考察を加えておく。この自己拡散感の高さは社会から呈示される枠組みがますます多様となり、実際参加するか否かにかかわらず、相矛盾した下位文化の同時的併存(成田1989)を見聞きする拡散的状況の反映であるとも言えよう。これがいちからやり直せそうな、いつまでも自分の今は仮の姿であるような、他人から見られている自分と、自分が思っている自分との間にしっくりした感じを見いだせないモラトリアム心性(小此木1978)の日常化の一端をみせている。がこのような社会のもうひとつの側面は選択肢の多い、多様性に開かれていることである。IDSに年令差が見られず、性差が見られたことは、今、女子学生をとりまく状況がこのようなものを強く反映していることを意味していると言えるのではないだろうか。

### 2. 自己愛人格の性差について

自己愛人格得点は年令高群、男子において有意に高い。今回の調査では、青年期を全体として捉えたので、特に男女差については考えなかったが、臨床的には青年期における男女の状況や青年期の課題に対する相違への視点

は非常に重要なものである点、自己愛をこの観点から考察していくことは今後の課題である。また、男女差について、これを男性性、女性性という観点からとらえると、自己愛人格が男性性にかかわっていると考えることもできよう。A. Lowen (1985) は自己愛を「社会的、外的活動と、自己の内面で、進行していることの間の亀裂」ととらえて、自分の身体性、また身体と密接に関係している感情との解離を問題にしている。即ち、自己イメージ（自我心理学でいうところの、自己表象の観念的な側面）に同一化することで、身体-感情-感覚という自己の内面的現実から、切り離されている状態と述べている。自己同一性の確立において、外的な外枠の自己を作り出していくことは、男性性にかかわる作業であろう。自己愛は女性性-EROSの側面を解離し、男性性に一面化している状態と考えることも出来るのではないだろうか。IMQ の自己イメージの検討と合わせて、今後の課題として、興味深い。

### 3. 各因子の特徴について

#### ー 青年期の臨床という観点から

因子Ⅰ「注目願望」は他の因子と特に性質を異にしていた。これについては、後にさらに考察する。

因子Ⅱ「リーダーシップ」の特徴は自己についてのある程度まとまった感覚、母性的な受容にささえられたポジティブな自己感情をもとに、世界に対する能動的な働きかけをなしていくことが出来るという確信、その資質が自らにあるという自信を表している。そして世界はそれに応じるであろうという確信の根底には世界に対するこのような母性性の投影がある。カウンセリングやセラピーでは、クライアントのこのような自己主張性、自発性、自己表明力を育てるのは、やはり、セラピストの母性性であることが、因子Ⅱのこの特徴からもうかがえる。受け入れているという安心感、神田橋（1990）のいう「抱え」の環境の中で、クライアントの自己主張性は育まれ、自発性が現われて来るようになる。マイナスの面を考えると、現実場面で、例えば、相手を自分の思うとおりに動かしたい、動かせるという他者操縦性、思いのままにしたいという支配性として、現われるであろう。これは母性性のネガティブな面の現われとして、頷けるものである。

因子Ⅲ「自己有能感」の特徴は自己拡散感とは相関関係は見られないことである。このことから、因子Ⅲが、「対自的」なものであるととらえた。これがいわゆる誇大自己の内容に相当すると言ってもいいのではないかと思われる。一般に「自惚れ」と言われるものである。し

かしポジティブな自己感情に支えられている。この誇大感すなわち、「私は特別だ」言う気持ちを支え切れなくなったとき、「有能な私」、「ずば抜けたものを持っている私」、「才能がある私」というこの承認を他者に求めるか、自己の幻想の世界に引き籠る、ということになるのではないだろうか。青年期の抑鬱の背後に、支え切れなくなった「自己有能感」がみられる。

因子Ⅳ「野心」は自己についてのある程度まとまった感覚、肯定的感情に支えられての外へ向けての意欲を表している因子である。アパシー青年に見られるいわゆる「オリズム」（笠原 1977）は自己愛人格のこのような意欲や野心、負けず嫌いという側面からも考えることが出来るかもしれない。笠原によるとアパシー青年は、完全主義的で何でも完全にやれる自己像を求めている。しかしこの側面が傷つけられるような場面に遭遇すると、彼らは退却し、ポジティブな自己感情を維持しようとする。しかも人に上手く頼ったり、助けを求めたりすることが出来ない。勢い競争場面から身を引いてしまうのである。またアパシー症候群は男子に顕著に見られるという笠原の報告も因子Ⅳに性差が見られた結果と符号している。

因子Ⅴ「優越性」は自己についてのある程度まとまった感覚、肯定的感情と、ポジティブな父親感情を背景に対人関係において自己が価値ある者として受け入れられているという確信をあらわす因子である。カウンセリングやセラピーにおいて、セラピストの父性性がこの自己愛側面が表している自己価値感を育てていくのであろう。しかし自我の発達が未成熟な場合、これは独善的な振る舞いとなって現われる。現実的な対人関係の中で、何が受け入れられ、何が受け入れられなかったのかを吟味することによって、自己価値の調整が行なわれていくのである。その根底に父性性が関わっていることがこの結果からも明らかになったといえよう。この自己愛側面が傷ついたとき、その傷付きの痛みをどのように受け入れてゆくのが、特に、自己確立、拡大を指向している青年期にとって重要な点であると考ええる。

因子Ⅵ「感受性」は因子Ⅲ同様に、自己のユニークさに対する自信をあらわしている。創造性などとも関連した感性、美意識という方面での自己の資質に対する自信であると意味付けた。しかし、IDS とは何ら相関関係はなかった。この側面は読み取ったつもりの他者の気持ちに対して、ひとりよがりな傷つきやすさとして現われてくるというマイナス面も持っているようだ。

さて先に残してあった因子Ⅰについて再度ふれよう。

自己愛人格と自己拡散感覚の関連であるが、自己拡散的になると自己愛的になるという臨床的な実現はある面では、実証的にも明らかにされたとと言える。それが因子Ⅰの特性である。因子Ⅰは先行研究に倣い、「注目願望」と命名した。自己拡散感が強くなるほど、この因子特性は強く現われる。即ち、対人関係や社会の中での自分の位置がつかめなくなったり、自分の意味付けが曖昧になったとき、「誰かに誉めてもらいたい。」「自分を見てほしい。」「敬意を払ってほしい。」と言った注目や称賛を求める気持ちや自己顕示の願望も強く生じてくるのである。図式的に今回の調査で仮定した6因子を用いて説明を試みると、自己拡散的な感じが高まった時、因子ⅡやⅣ、Ⅴの自己愛側面、即ち、自己主張性、積極的な野心や自己価値感は低下する。自信を以て言い出せない、何をやればいいのか分からなくて、意味は減退し、自分に信をおくことが出来ない感じに陥る。その時、自己愛ということに限って言えば、因子Ⅰのような自己確認を他者に求める、こちらを見てほしいという気持ちが強くなってくるといえるのである。この傾向を臨床的に捉えたのはKohutであった。Kohut (1971)は自己愛人格障害の患者の分析を通して、「鏡映転移」を理論化していった。それは分析が進む中で患者の誇大自己が治療的に活性化され、自分の偉大さに対する称賛、反響、追認、自己顕示を是認することのみを要求するという転移である。

しかし私達も日常、自尊心を深く傷つけられる事態に出会ったとき、悩みに抱えて彷徨うとき自我レベルでの現実的な解決を求めると同時に、この鏡映的なものを他者に求めているのではないだろうか。「私は偉大だ。」とまではいかなくても自己のユニークさ、自己の持つ能力を他者に照らし返してもらうことそのものを求めているように思われる。Winnicott (1971)の言うように、母親の瞳の中に子供は自分自身を見付けだすことが出来なければ、自分を照らし返し(reflect back, mirror back, give back)ってもらうことを求めて、虚しく鏡を探し続けなければならない。Kohutの「自己を映しだす(Mirroring)自己対象(注5)」, Winnicottの「照らし返し」という概念は非常に深い母子関係を言っている。また、分析における転移-逆転関係の中で、考察されたものである。しかし因子Ⅰはこのような側面と通じるものを持っているのではないだろうか。そこで因子Ⅰに現われている「こちらを見てほしいという気持ち」を「鏡映的願望」と命名しなおすことにする。

危機には「岐路」と言う意味があるという。青年期と「青年期的意味」の核心はまさに、人生における一つの「岐路」であり、「危機」であることが多い。水鏡に映っ

た己れの姿との邂逅は「Self-encounter」としての意味をもっている。自己(ユング派のいう心の中心)との出会いの深みには自己のなかの他者との出会いも準備されている。(Jacoby 1985)

先行研究では、自己愛特性に対し、「健康な自己愛」「不健康な自己愛」という意味付けがなされている。(大石 1988, 福田 '89, 佐方 '87)この場合の健康、不健康という分け方は必ずしも一定の基準があるわけではないが、一応、現実適応という面から言われていることが多いように思われる。即ち、今回の調査で言えば、自己拡散感と正の相関関係が見られた因子Ⅰが「不健康な自己愛」と言うことになるのかもしれない。また、いずれの場合でも重要ではあるが、特に、自己確立の只中にある青年期においては、自分の前に現前するさまざまな、内的、外的現実に適応していくことは、最重要課題ではある。この意味でも、因子Ⅰは、さらに考察されねばならないであろう。

また、臨床という観点に立つと、自己愛的体験の在り方とそれに対処する自我の働きについて。文節した見方をすることが重要な問題となる。自己愛人格の側面に健康、不健康という質的な差を求めるのではなく、むしろそれに対して、自我レベルで、現実とのバランスをどのように保っているのかが、問題となるのではないかとと思われる。今回の調査で、仮定した6因子を、自我がどのように受けとめていくのか、どう統合していくのか、実は適応という面で重要な問題になるのだと思われる。6因子にみるように、自己愛は生を前進させるエネルギーでもある。しかしそのためには絶えず、自我の介入が必要なのである。

以上の考察をもとにさらに、青年期の事例を検討していくことは今後の課題である。

(注1) 大阪市立大学、大阪府立大学、大阪大学、京都大学、神戸大学、英知大学のみなさんの協力をえた。

(注2) IMQの基礎的研究(被験者は本研究対象の371人である。)についてはすでに研究報告という形で発表(1990)した。

(注3) 基調的感情トーンの評定は、筆者および他2名で行なった。評定は被験者一人一人のイメージの流れを重視しつつ、評定者3名が各自行い、一致しなかったものについては、その都度検討し、最終的な一致点を求めた。

全項目数  $14 \times 371 = 5194$ 、不一致数230、一致率95.56%であった。



(注5) 自己対象 (Self-object) とは、乳児が自分自身の一部であるかのように経験する、環境の中のある特定のな一主として母親等—養育者を内省的な観点から逆説的な表現で名付けたものである。

本稿は三船が修士論文の一部を書き改めたものを、氏原と検討の上、あらためて、三船がまとめたものである。

## 引用、文献

- American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Third Edition, Washington, D. C., 1980. アメリカ精神医学会 高橋三郎ほか訳 1982 DSM-III: 精神障害の分類と診断の手引 医学書院
- Annie Rich, "Pathologic Forms of Self-Esteem Regulation," from *Psychoanalytic Study of the Child*, Vol. 15, pp. 205-32.
- Arnold M. Cooper, "Narcissism," from *American Handbook of Psychiatry*, edited by S. Arieti, Chapter 15, pp. 297-316
- 馬場謙一 自我同一性の形成と危機 笠原嘉他編 青年の精神病理 1976 弘文堂
- Elson, M. (Edited): *The Kohut Seminars*, 1987, W. W. Norton & Company. 伊藤洸監訳 コフロト自己心理セミナー 1 1989
- Emmons, R. A 1981 Relationship between Narcissism and Sensation Seeking. *Psychoanal Reports*, 48, 247-250
- Emmons, R. A 1984 Factor Analysis and Construct Validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality & Assessment*, 48, 291-300.
- Emmons, R. A 1987 Narcissism: theory and Measurement. *Journal of Personality & Social Psychology*, 52, 11-17.
- Erikson, E.: *The Problem of Ego Identity* 1956. In: *Identity and the Life Cycle*. New York, I. U. P. 小此木訳編: 自我同一性 誠信書房 1973
- Exner, J. E. Jr. 1969 Rorschach Responses as an Index of Narcissism. *Journal of Projective Technique and Personality Assessment*, 33, 324-330
- Franz, L. M. VON 1970 *The Problem of The Aeternus. 永遠の少年* 松代他訳 紀伊國屋書店 1982
- Freud, S.: *Das Ich und das Es*, 1923. 小此木訳: 自我とエス フロイト著作集 6 人文書院 1970
- Freud, S.: *Trauer und Melancholie*, 1917. (井村訳 悲哀とメランコリー フロイト著作集 6 人文書院 1970)
- Freud, S.: *Zur Einführung des NarziBmus*, (1914). On Narcissism: An Introduction. S. E. 14: 67-102 吉村(訳) ナルシズム入門 フロイト著作集 5 人文書院 1969
- 福田美由紀 1988: ナルシズムの基礎的研究 1 臨床教育学研究 巻14 NO1 1-12
- 福田美由紀 1989: ナルシズムの基礎的研究 2 関西学院大学 教育学科研究年報 第15号 57-75
- Heinz Kohut and Ernest S. Wolf, "The Disorders of the Self and Their Treatment: An Outline," Vol. 59: pp. 413-25, 1978.
- 伊藤 洸 1980: 精神発達と分離—固体化理論 小此木啓吾編 青年の精神病理 2 弘文堂
- 伊藤 洸 1982: ナルシズム研究 I 精神分析研究 vol 26 NO2 47-71
- Jacobson, E.: *The Self and the Object World: Vicissitudes of Their Infantile Cathe- xes and Their Influences on Ideational and Affective Development*. *Psychoanal. St. Child*. IX:75-127, New York, I. U. P. 1964. 伊藤洸(訳): 自己と対象世界 岩崎学術出版社 1981
- Jacoby, M. 1985: *Individuation und Narzissmus Psychologie des Selbst bei C. G. Jung and H. Kohut*. Pfeiffer, : *Individuation and Narcissism*. trans, Myron Gubitz. 1990. Routledge
- Jung, C. G. 1935a: *Archetypes of the Collective Unconscious*, CW9 /1.
- Jung, C. G. *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten*, Zurich 1933 野田倬訳 自我と無意識の関係 1982 人文書院
- Jung, C. G. 1943: *The Psychology of the Unconscious*, CW7
- 梶田毅一 1988: 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 神田橋條治 1990: 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版

- 社
- 笠原 嘉 1977 : 青年期 中央公論社
- 河合隼雄 1967 : ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 1979 : 母性社会日本の病理 中央公論社
- Kanzer, M. : Freud's Uses of The Terms Autotism and Narcissism J. Amer. Psychoanal. Ass., 12 : 529-39, 1964.
- Masterson, J. F. 1972 : Treatment of the Borderline Adolescent -A developmental approach. John Wiley & Sons. 笠原, 成田 訳 : 青年期境界例の治療 1979 金剛出版
- Masterson, J. F. 1981 : The Narcissistic and Borderline Disorder. Brunner / Mazel INC. 富山・尾崎訳 : 自己愛と境界例 1990 星和書房
- Millon, T. 1981 : Disorders of Personality, DSM-III : Axis II. John Wiley & Sons.
- Moore, G.B. : Toward a Clarification of the Concept of Narcissism. Psychoanal. St. Child, 30:243-276, Yale Univ. Press, New Heaven, 1975.
- 村瀬孝雄 : 青年期危機概念をめぐる実証的考察 笠原嘉他編 青年の精神病理 1976 弘文堂
- Murray, J. (1964) . Narcissism and the ego ideal. J. Am. Psychoanal. Ass. 12, 477-571.
- 中西信男・水野正憲 古市裕一 佐方哲彦 1985 : アイデンティティの心理 有斐閣
- 中西信男・佐方哲彦 1986 : ナルシシズム時代の人間学・自己心理学入門 福村出版
- 小此木啓吾 1981 : 自己愛人間—現代ナルシシズム論 朝日出版社
- 小此木啓吾 1972 : モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 小此木啓吾 1979 : モラトリアム人間の心理構造 中央公論社
- 小此木啓吾 1976 : 青年的精神療法の基本問題 笠原嘉他編 青年の精神病理 弘文堂
- 大石文博 1988 : Narcissistic Personalityの研究(1) 関西学院大学 教育学科研究年報 第14号 1-5
- 大石文博 1987 : ナルシシズムの心理学的研究(1) 人文論究 第37巻第2号 27-44
- Ornstein, P. H. : A Discussion of the paper by the Treatment of Narcissistic Personalities. Int. J. Psychoanal. 55 : 241-247, 1974.
- Ornstein, P. H. (ed.) 1978 : The Search for the Self : Selected Writings of Heinz Kohut (1950-1978) volume 1 & volume 2. International Universities Press. 伊藤洸・コフォート入門 1986 岩崎学術出版社
- オウィディウス, N. P. 中村善也訳 1981 変身物語(上・下) 岩波書店
- Pulver, S. : Narcissism. The Term and the Concept. J. Am. Psychoanal. Ass., 18 : 319-341, 1970.
- Raskin, R. E & Hall, C. S. 1979 Narcissistic Personality Inventory Psychological Reports, 45, 590
- Raskin, R. N. 1980 : Narcissism and Creativity : Are They Related ? Psychological Reports, 46, 55-60
- Raskin, R. E & Terry H. 1988 : A Principal-Components Analysis of Narcissistic Personality Inventory and Further Evidence Its Construct Validity, Journal of Personality & Social Psychology 54, 5, 890-2.
- Solomon, R. S. 1982 Validity of the MMPI Narcissistic personality Disorder Scale Psychological Reports, 50, 463-466.
- Stolorow, R. D. : Toward a functional definition of narcissism. Int. J. Psychoanal. 56 : 179-185, 1975.
- 菅佐和子 1976 : 心理テストによって測定されたSelf-Esteemの研究 京都大学教育学部紀要 巻22 64-71
- 氏原 寛 1977 : 永遠の少年 河合隼雄編 心理療法の実際 80-109
- 氏原 寛 1977 : 永遠の少年 氏原他訳編 : 現代青年心理学 倍風館
- 梅本, 河合, 斎藤他, 1972 : I M Q制作の試み 18 154-170
- Winnicott・D・W 19765 : The maturatoional process and Facilitaing Environment. 牛島定信訳 1977 : 情緒発達精神分析理論 岩崎学術出版社
- Winnicott・D・W 1971 : Playing and Reality. Tavistock Publication. 橋本雅雄訳 1979 : 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社

(平成3年10月11日受理)

### summary

The purpose of this study is to examine narcissism on adolescence. In this study, narcissism on adolescence are to be evaluated according to Rakin's Narcissistic Personality Inventory (1979). Then, in term of selfidentity, Nakanishi & Sakata's Identity diffusion Scal (1982) is to be used for it evaluation. And in order to deal especially with ajustment, selffeeling and pairrent-feeling are to be evaluated according to Umehara et'al's IMAGE-QUESTION(1972).

Factor analysis of the questionnaire (NPI) extracted 6 factors - "mirroling-xepectetion", "leadrship", "sence of ability", "ambition", "superiority", "sensitivity". Then, these factors chacter is to examine about inner construction of factor and relation to self-identity, self-feeling and pairrent-feeling.

This result are also discussed from the point of clinical psychology of adolescence.